



Title	動物と人間-文明批評の視点から- : (その二)仏教に見る動物観-阿含経を中心として-
Author(s)	宮田, 敦子
Citation	年報人間科学. 2000, 21, p. 57-75
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4726">https://doi.org/10.18910/4726</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 動物と人間——文明批判の視点から——

(その二) 仏教に見る動物観——阿含経を中心として——

### 〈要旨〉

キリスト教においては、動物は人間が支配するための存在でしかなかったが、仏教では動物はどのように扱われているのだろうか？

旧約聖書に記された「モーゼの十戒」中の「汝殺すなかれ」は専ら人間の殺害を禁ずるものであったが、それに相当する仏教の「不殺生戒」は人間のみならず、一切衆生、人間にとって危険な動物さえその対象とし、仏教ではそれらの生き物に対する慈悲の心も説かれている。菩薩に到つては、最終的には生けるものために自らを犠牲にすることさえ求められている。

こうした理念は、因果応報、輪廻転生の思想ばかりでなく、「他者への思いやり」の心から生まれた。この、生けるものへの「慈しみの心」は、他者を自分より一段下に見る「憐れみの心」とは別物である。キリスト教が「愛」を説くのに対し、仏教は「慈悲」を説くと言われるが、「慈」とはサンスクリットの「友」からきた言葉であり、「悲」は同じくサンスクリットの「呻き」からきており、呻き苦しむ者と一緒になつて共感する行為のことだという。つまり、仏教は生きとし生けるものを「友」と見なし、人間

だけを決して特別視せず、他の生けるものと同列に置いているのである。従つて動物にも人間同様、救済への道は開かれているし、宗教的意義も認められている。仏教は、そうした生けるものすべての苦しみを共感する宗教であり、「動物に対する人間の独善的なうぬぼれ」を脱しようとするなら、極めて大きな示唆を与えてくれるように思う。

キーワード

動物 仏教 慈悲 犠牲 殺生

宮田 敦子

(一) はじめに

竹林の崖下、飢えた雌虎がいる。空腹の余り、産んだ我が子をまさに食べようとするその時、崖の上から我が身を餌食に投げ出す人影。有名な玉虫厨子の台座に描かれた、仏教経典「金光明経」の中の「捨身飼虎」の物語である。筆者は先の論文で、キリスト教における動物観を考察した。旧約聖書中の杖拳に暇のない惨たらしい動物犠牲の記述をみた。それに較べ、人間が動物のために進んで我が身を犠牲にする、この仏教の話は何という違いだろう。古代インドの王、アショーカ(阿育)は残虐な性格で、その即位に際しては九人の異母兄弟を殺害し、東インドのカリンガ地方征服時には何十万という人を殺したと伝えられている。その暴虐阿育と呼ばれたアショーカ王が、仏教に帰依してからは理想的な君主(法阿育)となり、人間のみならず動物のためにも療養院を設け、人間と動物に効能のある薬草や果樹を各地に栽培させ、多くの井戸や泉を作って人畜の用に供させたという。狩猟を断念したのは勿論のことである。

暴政を行っていた王を改心させ、人間のみならず動物にまで配慮する理想の君主に変えたという仏教。ではいったい仏教では動物はどのように捉えられ、どのように扱われているのだろうか？キリスト教では、動物は人間が支配するための存在でしかなかったが、果たして仏教では動物に固有の価値が認められているのだろうか？動物と人間はどのような関係にあるのだろうか？

仏教とは、周知のように紀元前五世紀頃インドに生まれたシャーマン、即ち釈迦の教えであるが、時代の流れと共にインド国内はもとより、インド国外に広まるにつれて、様々な地域や民族の様々な信仰や文化の中に統合され、多種多様に変化、発展をとげていった。そして六世紀半ばに持ち込まれ、明治時代に至るまで伝えられてきたわが国の仏教は、と言えば「まったく中国の仏教に限られていた。われわれが受容したものは、中国語に翻訳された経典であり、中国化せられた宗派であり、中国僧による注疏であって、そのほかの仏教はわれわれの先人のまったく知らざるところであった」<sup>1)</sup>。そして明治になって初めてわが国に伝えられた「阿含経」(パリー五部と漢訳の四つの阿含経をあわせ意味する)のみが仏教の根本聖典たることを主張し得るものとなった。今日の仏教研究においては、ブッダの教法をその原初的なすがたで伝える経典として、学問的吟味に堪えるものは、この経群を描いて他にまったく存しないのである。かつてブッダは、何を説いたか、いかに語ったか。そのことをありしがままに知りたいと欲するならば、人はこの経に赴くより他はないのである。<sup>2)</sup>「そこで筆者も、この原始仏教、つまりブッダの人と思想の真相を最もよく伝えるという「阿含経」を中心として、仏教の中の動物観について考察してみたいと思う。

(二) 仏教にみる「不殺生戒」

旧約聖書には、有名な「モーゼの十戒」なるものが記されている。

いわば、神が人間に下した、人間が守らねばならぬ命令である。二カ所<sup>②</sup>に出てくるが、その六番目が「汝殺すなかれ」である。これは、日本語では不明であるが、英訳では「You shall not commit murder.」、独訳では「Du sollst nicht morden.」、仏訳では「Tu ne commettras pas de meurtre.」となっている。つまり、「殺害」あるいは「殺す」という言葉に、人にも動物にも使える「killing」や「to-ten」、「abatage」という単語を使っていない。「murder」も「morden」、「meurtre」も共に専ら人間について使われる言葉である<sup>④</sup>。「ウバニシャッド」の哲学に傾倒したショーペンハウアーは、ヨーロッパの幾つかの国語に見られる単語の、人と動物に対する使い分けを指摘し、人間の動物に対する差別意識を痛烈に批判していたが<sup>⑤</sup>、ここでもそれが歴然としている。即ちこの「十戒」の六番目の「殺す」は、「人を殺す」という意味に他ならない。それには人間以外の動物は含まれていない。人間以外の生き物には一切触れていないのである。折りに触れて生け贄を要求する神である。「人間以外の」生き物を殺すなかれ」などと言うはずもない。それどころか、ある論者によれば、『旧約聖書』に書かれる多くの殺人記録、この殺人にエホバの神は力を貸し、モーゼもまた殺人の実行者であったことを考えれば、この「殺すなかれ」の意味は、イスラエルの同邦人を殺してはいけないという意味か、あるいは、エホバの神の許しなくして殺してはならないという意味ではないか、ということになる。さらに、エホバの神は、その意志に従わないものに、しばしば、あまりにもしばしば死を与え、それはキリスト教になってもたいして

変わっていない、とされ、最後の審判においては、モーゼの神はイエスらしい人物をつかわし、何人殺せば気が休まるというのか、と問われている。そして「殺人を肯定する思想」(＝キリスト教)と「それを否定する思想」(＝仏教)と、どちらが理性的か、とまで言われている<sup>⑥</sup>。

ところで、「モーゼの十戒」に対してすぐに思い浮かぶのが、仏教の「五戒」(Pancasila)である。「五戒」とは、原始仏教時代にすでに成立していた在俗信者が終身守ることを誓う五つの戒(習慣)で、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒の五項からなる。つまり、仏教では信者の守るべき戒律の第一番目が「不殺生戒」(pativijāṭṭha-pativāto hoti)なのである。「仏陀は不殺生戒を以って在家出家に通ずる大戒とした」<sup>⑦</sup>から、勿論、出家者も守らねばならない戒律である。「モーゼの十戒」の「汝殺すなかれ」に相当するが、しかしこれは人間のみならず「一切衆生」、つまり一切の生きとし生けるものを殺さないようにしよう、というものである。いや、世を捨て山野で修行する出家者にとつては、むしろ人間以外のものの方に重点が置かれている、と言っても良いくらいである。そしてこの「不殺生戒」が五戒の第一番目に挙げられている、ということだけから見ても、あらゆる生きものの殺害を避けること、実行可能かどうかは別問題として、それが仏教にとつていかに重要視されているかは明らかであろう。仏教が、普段は「不殺生を貴びながらも、祭祀にあたっては、無辜の獣類を無数に殺して顧みぬ」<sup>⑧</sup>「バラモン教や、当時各地で行われていた土着の血生臭さい動物犠牲の祭祀を批判して

生まれたことを考えれば、それは当然のことかも知れない。「阿含経」のひとつ「相應部經典」にも、釈尊が動物供犠を「利益がない」と評している箇所がある。コーサラ国のパセーナディ大王が五百の牡牛、五百の牡犢、五百の山羊、五百の羊を柱に縛りつけて供犠の準備をしているのを聞いた釈尊は、次のような偈を詠じたという。

「献馬祭（馬を殺して神に献ずる祭）に、献人祭（人身御供を献ずる祭）／棒擲げ祭（棒をなげる祭、詳細は不明）に、ソーマ祭（ソーマ酒を飲む祭）／さては無遮会（一切のものを施す祭）とくさぐさの／供犠はあれども利益はない／山羊だ、羊だ、また牛と／ただ殺戮をこととして／犠牲をそなえる祭には／正道をゆく大聖はゆかない／山羊も、羊も、また牛も／殺さるることあらずして／つねに行なう供犠にこそ／正道をゆく大聖はゆけ／かかる供犠には大果あり／その司祭者もめぐまれて／これぞすぐれた供犠なれと／諸天も賞讃するならん<sup>9)</sup>」

あるいは、「スッタニパータ」の三〇八―三二三には、そこで戦車兵の主である王は、バラモンたちに勧められて、幾百千の多くの牛を犠牲のために屠らせた。／牛は、脚を以ても、角を以ても、何によつても決して（他のものを）害うことがなくて、羊に等しく柔和で、瓶をみたまは乳を搾らせてくれる。しかるに王は、角をとらえて、刃を以てこれを屠らせた。／刃が牛に落ちるや、そのとき神々と祖霊と帝釈天と阿修羅と羅刹たちは、「不法なことだ」と叫んだ。／昔は、欲と飢えと老いという三つの病いがあったただけであった。ところが諸々の家

畜を祀りのために殺したので、九十八種の病いが起つた。／このように（殺害の）武器を不法に下すということは、昔から行われて、今に伝わったという。何ら害のない（牛が）殺される。祭祀を行う人は理法に背いているのである。／このように昔からのこのつまらぬ習俗は、識者の非難するものである。人はこのようなことを見ることに、祭祀実行者を非難する<sup>10)</sup>。

とある。また、「業の分類」という経説によれば、殺生をしたり、殺生を喜んだり、讃嘆すれば、短命になるし、逆に、殺生を止める、殺生を止めるのを称賛する、また殺生を止めるように促す、その行為を称賛する、人間や家畜や豚や鶏などが殺されようとするときに、それらを解き放してやると、長寿になるといふ<sup>11)</sup>。

では仏教の開祖である釈迦は、人間は生きものに対してどのような態度をとるべきだと述べているのだろうか。「仏教の多数の諸聖典のうちでも、最も古いものであり、歴史的人物としてのゴータマ・ブツダ（釈尊）のことに最も近い詩句を集成した<sup>12)</sup>」「スッタニパータ」に沿つて具体的に見てみよう。

求道者の理想的な生活態度を「犀の角」にたとえて説いている同名のタイトルの節の初め（三五）には次のような詩がある。

あらゆる生きものに対して暴力を加えることなく、あらゆる生きものいづれをも悩ますことなく、「……」犀の角のようにただ独り歩め<sup>13)</sup>。

あるいは、「賤しい人」という節では、人は生れによつて賤しい人となるのではなく、行為によつて賤しい人になるのだ、と説いて、「賤

しい人」の様々な例が挙げられているが、その二番目に（一一七）「生きものを害し、生きものに対するあわれみのない人」を挙げてゐる。

一度生まれるものでも、二度生まれるものでも、この世で生きものを害し、生きものに対するあわれみのない人、——彼を賤しい人であると知れ<sup>14</sup>。

また、「慈しみ」と題する節は、南方仏教では特に重要視され、他の經典「クツダカ・パータ」にも収められているという<sup>15</sup>。少し長い<sup>16</sup>が、全節（一四三—一五二）を引用してみよう。

究極の理想に通じた人が、この平安の境地に達してなすべきことは、次のとおりである。能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思ひ上がることのない者であらねばならぬ。／足ることを知り、わずかの食物で暮し、雑務少く、生活もまた簡素であり、諸々の感官が静まり、聡明で、高ぶることなく、諸々の（ひとの）家で食ることがない。／他の識者の非難を受けるような下劣な行いを、決してしてはならない。一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穩であれ、安樂であれ。／いかなる生物生類であつても、怯えているものでも強剛なものでも、悉く、長いものでも、大きなものでも、中くらいのものでも、短いものでも、微細なものでも、粗大なものでも、／目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるもの

は、幸せであれ。／何びとも他人を欺いてはならない。たといどこにあつても他人を軽んじてはならない。悩まそうとして怒りの想いをいだいて互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない。／あたかも、母が己が独り子を命を賭けて護るよう<sup>17</sup>に、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の（慈しみの）こころを起すべし。／また全世界に対して無量の慈しみの意を起すべし。上に、下に、また横に、傷害なく怨みなく敵意なき（慈しみを行うべし）。／立ちつつも、歩みつつも、坐しつつも、臥しつつも、眠らないでいる限りは、この（慈しみの）心づかいをしつかりとたもて。この世では、この状態を崇高な境地と呼ぶ。／諸々の邪まな見解にとらわれず、戒を保ち、見るはたらきを具えて、諸々の欲望に関する貪りを除いた人は、決して再び母胎に宿ることがないであろう<sup>16</sup>。

ここには道を究め、平安の境地に達した人のあるべき姿が描かれているが、大きなものであれ、目に見えないものであれ、あるいは、まだ生まれていないものであれ、一切の生きとし生けるものの幸福、平安が願われ、母親が自分の子供を命を賭けて守るように、そのように一切の生きとし生けるものに対しても無量の慈しみの心を起さねばならぬ、と説かれている。しかも、眠っている時以外は、この心を忘れてはならぬ、とまで言っているのである。

五章からなる「スッタニパータ」の第一章をざっと見ただけでも、このように生きものに対する慈しみの心の大切さが至るところで説かれているのである。旧約聖書で枚挙に暇がなかった惨たらしい動

物犠牲の記述に引き替え、仏典で杖拳に暇がないのが、生きものを殺してはならないというだけでなく、それらのものに対して常に慈しみの心を保て、という教えなのである。「不殺生戒」は生物の殺害を戒める言葉であるが、仏教經典ではそればかりではなく、あらゆる生物に対する慈悲の心も説かれているのである。

ところで「不殺生戒」でいう殺してはならない生きものとは、既に述べたように一切衆生、ありとあらゆる生きているもののものである。従ってそれには人間にとつて危険な生物まで含まれている。例えば、大は虎やライオンといった猛獣、そして毒蛇、蠍、百足、小は毒蜘蛛、蜂や蚊、蟻に至るまで殺さないことが理想とされているのである。従って人間に何の害も加えない小さな生物を何の情もなしに殺すことは冷酷だと見なされるのである。実際、極悪非道な人間を殺すことと一匹の蟻を殺すこととは、どちらが悪いことかという議論が真剣になされている<sup>17)</sup>。

では仏典では具体的には、生きものを慈しみ、傷ついたり殺したりすることがないように、どうしなければならぬと教えているのだろうか？以下に主としてシュミットハウゼンとマイトウリムルティ共著の「仏教における動物と人間」を参考に、見てみよう。

まず、修行僧に対しては、原始仏典は次のように教えている。地上の小さな生きものを踏み潰さないように、木の履き物は履いてはならない。また雨期の間は他の季節に比べて地上に小さな生きものが多いので、行脚托鉢のために歩き回ってそれらを傷つけることがないように、外出を避けて一カ所にこもって集団生活をしなければ

ならない（雨安居・夏安居）。また、水は飲む前、捨てる前には、その中に小さな生きものがないかよく確かめねばならない。そして場合によっては濾過しなければならぬ。従って、僧侶は遊行する際に必ず濾過するための布（漉水囊）を持参せねばならず、これを持つていない僧侶は、この規律を破るより、喉の渴ぎで死ぬ方がましだ、とさえ記されている。また、露地燃火戒、壞生種戒、掘地戒と言われるものもあるという<sup>18)</sup>。露地燃火戒とは、地中の虫を殺さないように露地で焚火をしてはならない、という戒めであり、壞生種戒とは、草木やそれに寄生している虫などを傷つけないように、草原などを歩く時は払子で虫をはらい、杖で路上に延びた草をよけて歩くべきだ、というものであり、掘地戒というのは、地中の生物を殺さないように地面を掘ってはならない、という戒めである。ジャイナ教と違って、仏教では蚊や虻に対しては、衣服や蚊帳で防備することが許されているし、あるいは、建築上の工夫や家具・調度品で彼等の侵入を防ぐことも勧められているが、僧侶たるものはそれらに忍耐強く耐えねばならない。そして、もつと大きな危険な動物に対しては、精神的な修行の完成の域に達している者なら、いかなる恐怖心も起こらないはずだし、修行途上の者にとつては、そのような動物は精神的修行の強化への刺激になる。「スッタニパータ」の九六四にも次のような記述がある。「しっかりと気をつけ分限を守る聡明な修行者は、五種の恐怖におじけてはならない。すなわち襲いかかる虻と蚊と爬虫類と四足獣と人間（盗賊など）に触れることである<sup>19)</sup>。」また、「相應部經典」にも、次のように述べられている。

「とまよひ歩く」「猛獸」が多く、恐ろしいものが多く、また蚊虻や蛇が多いが、空屋にいる偉大な聖者は、そこで一本の毛髪さえも動かさない<sup>20</sup>。」またそれらの動物にはこちらから優しい心を向けることによって、彼等を穏やかな気持ちにさせることが出来るはずであるし、三宝、つまりブツダやブツダの教え、また教団のことを思い浮かべれば恐怖心から解放されるはずである、とも説く。更に、あらゆる生けるものに対して憐れみの心を抱くばかりでなく、罨にかかった魚や動物を助けることは、その人の心の浄化に非常に役立つことであり、また、たとえ犬や鳥のような軽蔑される動物でも、動物に餌をやることは功德になるし、池の魚の餌になるように、食べ残しの皿を池で洗うことも功德になる。更に大乘仏教の教典では、菩薩<sup>21</sup>は自分の食べ物の四分の一を犬や鳥やその他の飢えた動物に分け与えねばならないし、捕らえられた動物を解放し、殺される運命にある動物は、どんな手段を使つても救う努力をせねばならない。自然条件によつて干上がった川の魚を救助してやることも模範的行為とされる。そして、最終的には菩薩たるもの、冒頭に記した「捨身飼虎」の物語のように、自分の体あるいはその一部を動物の餌に差し出す用意さえできていなければならぬ、と教えている。

一方、在俗信者に対しては原始仏典は次のように説いているといふ。職業という点から見ると、敬虔な仏教徒の商人は武器、生物、肉、毒の取り引きをしてはならない。また兵士という仕事は当然「不殺生戒」と両立し難いし、獵師、漁師の仕事もそれと相容れるものではない。ある経典では、難行苦行で自己を苦しめる者や、

犠牲獣を捧げるヴェーダの儀式の執行者と並んで、鳥刺し、獵師や漁師が「他者を苦しめる者」として、仏道修行者と対置されている<sup>22</sup>。それ以外にも王侯貴族は娯楽や武術訓練のために、しばしば狩猟を行ったが、これもまた「不殺生戒」とは調和しない。国王には(四足の)野生動物と鳥の保護が義務づけられてもいる。そこでアシヨーカ王のように狩猟を断念する王もあつた。その上、彼は勅令を出し、思い切つた動物殺害制限を発表し、将来は完全に禁止すると予告し、人間と動物のための施療院や井泉を建設し、薬用植物、樹木を植えさせたといふ。

しかし、現実問題として生けるものを殺す意図がなくても、人間が生きていく上で不可欠の農業では、地を這うもの、あるいは地中に生きるものを殺傷してしまうことは不可避であるし、収穫物を食い荒らす害虫の問題も生じる。あるいは肉食の問題も起こってくる。食肉というのは一般に殺された動物によつて供給されるからである。他の生けるものが生きて行かねばならぬのと同様に、人間もまた生きねばならぬとすれば、農業であれ何であれ一切衆生の殺傷を完全に回避することは明らかに不可能である。そこで仏教では、ジャイナ教のように「余りに厳格に実行しようとして、その極、遂に徒らに身を苦しめる」ことを避け、あくまで中道的態度<sup>23</sup>を保ち、時と共に殺された動物の霊を弔う慰霊祭のようなものが生れ、また害虫、害獣を追い払う儀式、呪文も発達したし、教団への寄進によつて破戒行為が相殺されることもあつた。肉食に関しては、原始仏典ではその動物が自分のためにわざわざ殺されたのだ、ということを見た

り聞いたりしなければ、あるいはその危惧がない場合には、僧侶でさえ肉を食べてもよいとされている。更に、いわゆる「不殺生日」が設けられ、普段は実行不可能な理想が少なくともこの日には一時的に実現され、人々に戒律を改めて思い起こさせた。ということはつまり、仏教では戒律は破られることが前提になっているとさえ言えるだろう。事実、仏教の教理では罰は説かれず、仏教教団でも力を以てする刑罰は行わない<sup>24</sup>。

ともあれ、仏教では生きものを大切にすべく様々な教えが説かれている。では、これほどまでに重要視される、生けるものに対する慈しみの心は、一体どこから導き出されたのだろうか？

インドには「ヴェーダ」と呼ばれる釈迦生誕以前の、インド最古の聖典群があるが、その後期ヴェーダのテキストには、生きもの、特に人間が傷つけ、あるいは殺し、そして食べる動物が、それに対して人間に復讐する、場合によっては人間がこの世でそれらの動物になしたのと全く同じことをあの世で人間に仕返しする、という記述が無数に見い出され、これを信じる人々は、まず復讐される原因をつくらない、つまりどんな生きものも殺さない *ahimsa* (アヒンサー)、ということを生生活態度の重要なモットーにしたという。また、ジャイナ教は、生きものを殺したり傷つけたりしないという生活態度を救済の要素とし、これを守れば幸せな来世を、これを犯せば不幸な来世を約束したという。こうした「因果応報」の思想を仏教も確かに引き継いでいる。そして自分の幸福な来世を願って、生けるものを大切にしようという思想が生まれた、と考えるのはごく自然

のことである。更に仏教には、後で詳しく見るように「輪廻転生」という思想がある。それによれば、身の回りの生けるものすべては前世で血がつながっていたという可能性を否定できなくなる。「相応部経典」から釈迦の言葉を引用してみよう。

「比丘等よ、輪廻は無始にして、衆生の、無明に覆はれ、渴愛に縛せられて、流轉し、輪廻せし本際は、知らるゝことなし。／比丘等よ、これらの長時に、嘗て母たらざりし衆生を見出すこと難し。『：／：』嘗て父たらざりし衆生を見出すこと難し。『：／：』嘗て兄弟たらざりし衆生を見出すこと難し。『：／：』嘗て姉妹たらざりし衆生を見出すこと難し。『：／：』嘗て子たらざりし衆生を見出すこと難し。『：／：』嘗て娘たらざりし衆生を見出すこと難し。／所以は何ぞや。比丘等よ、輪廻は無始にして、衆生の、無明に覆はれ、渴愛に縛せられて、流轉し輪廻せし本際は、知られざればなり<sup>25</sup>。

従ってここからも、どの生けるものに対しても慈しみの心を持たねばならぬ、という考えが生まれる訳である。我が国最古の仏教説話集「日本現報善悪霊異記」にも同じような思想が表現されている。

現報甚だ近し。因果を信くべし。畜生に見ゆといへども、我が過去の父母なり。六道四生はわが生れむ家なり。そゑに、慈悲なくはあるべからず<sup>26</sup>。

しかし、仏教が生きものへの慈しみを説くのは、こうした「因果応報」や「輪廻転生」の思想からばかりではない。「他者への思いやり」の思想も重要な柱となっている。他者の身になって考え、自分がし

てほしいように他者も扱おう、という思想である。例えば、「相應部經典」には、

居士等よ、此處に聖弟子は是の如く思擇す、「我は生を欲し死を欲せず樂を欲し苦を厭ふ。我、生を欲し死を欲せず樂を欲し苦を厭ふに、若し我命を奪ふ者あらば我可愛可意にあらじ。他も生を欲し死を欲せず樂を欲し苦を厭ふに、若し我、その命を奪はば可愛可意にあらじ。我に於て不可愛不可意の法は他に於ても不可愛不可意の法なり。我に於て不可愛不可意の法を我、云何ぞ他に加へんや」と。是の如く思擇して自ら殺生を離し、他に勸めて殺生を離せしめ、殺生の離を讚歎す。是の如きは身行にして邊際清淨なり<sup>(27)</sup>。

とある。あるいは「ダンマパダ」の二一九―二二〇には、

すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。／すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとつて生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ<sup>(28)</sup>。

とあり、「スッタニパータ」の七〇五には、

「かれらもわたくしと同様であり、わたくしもかれらと同様である」と思つて、わが身に引きくらべて、（生きものを）殺してはならぬ。また他人をして殺させてはならぬ<sup>(30)</sup>。

とある。更に、「ウダーナヴァルガ」の第五章の一八―一九にも、

どの方向に心でさがし求めてみても、自分よりもさらに愛しい

ものをどこにも見出さなかつた。そのように、他人にとつてもそれぞれの自己がいたいのである。それ故に、自分のために他人を害してはならない。／すべての者は暴力におびえている。すべての（生きもの）にとつて生命が愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ<sup>(31)</sup>。

とある。人間のみなならず感覺能力をもつた生きものすべては、どれも同じように暴力におびえ、死を恐れていると説く。そこから先に引用した「スッタニパータ」の「慈しみ」という節にも明記されているように、生きとし生けるものに対して、殺すことは勿論、傷つけたり、苦しめたりといった残酷なこと、さらには敵意をもつことさえ断念しなければならない、という思想が生まれてくる。また、「中部經典」の中には、次のような記述が見られる。

「世尊曰く」「チーブカ、或は如來に供せん為、或は如來の弟子に供せん為に、生類を殺す者は、彼は五事を以て多くの非功徳を生ず。即、第一に彼は次の如く言ふ、「汝等行きてかの生物を牽き來れ」と。此の初事を以て多くの非功徳を生ず。かくて次にかの生物は頸に苦痛を受けつ、牽かれ來り、苦憂を受く。此の第二事を以て多くの非功徳を生ず。次に又彼は言ふ、「汝等行きてかの生物を殺害せよ」と。此の第三事を以て多くの非功徳を生ず。次にかの生物は殺害されつ、苦憂を受く。此の第四事を以て多くの非功徳を生ず。次に彼は或は如來を、或は如來の弟子を不當に燒害す。此の第五事を以て多くの非功徳を生ず。チーブカ、如來に供せん為、或は如來の弟子に供せん為に、生

類を殺す者は、彼は此の五事を以て多くの非功徳を生ず」と<sup>32</sup>。

生物殺害の救い難さは、殺害行為の前とその最中にその生物に痛みや苦しみを与えるからだ、と考える。一八世紀末にジェレミ・ベンサムは、動物にも人間と同じように苦しむという能力があることを指摘し、そこから動物にも尊重され、保護され、守られる権利を認め、これを保護する義務が人間にあると説いた<sup>33</sup>。ベンサムやシンガーについてはまた後に触れるつもりだが、同じことを既に初期仏教経典は説いていたのである。

さて、今見てきたようにキリスト教と対照的な仏教の「生きとし生けるもの」を慈しむ心は、「因果応報」や「輪廻転生」の思想、あるいは「他者への思いやり」から生れてきた。ところで、このうちの「因果応報」や「輪廻転生」の思想から導き出された慈しむ心は、自分が来世で復讐されないために、少しでも良い世界に生まれたいために、あるいは生けるものはすべて前世で自分と血の繋がりがあつたかも知れないから、という思いから惹き起こされている。つまり、いわば自己中心的な考えから生まれたと言えるだろう。それに対して「他者への思いやり」というのは、自分以外の生けるものを自分と同等のものと見なすところから生まれてくる。人間も他の生けるものと何ら変わるところがないことを認めることから生まれてくる、と言えるだろう。ちなみに、キリスト教は「愛」を説き、仏教は「慈悲」を説く、としばしば言われるが、この「慈」の原語はサンスクリットの「マイトレーヤ」で、この言葉は「ミトラ」(友)

という語から作られたという。また「悲」というのは、サンスクリットの「カルナー」で、「呻き」という意味だという。そして呻き苦しむ者と一緒になって共感する行為が「悲」だという<sup>34</sup>。とすると仏教というのは、すべての生きとし生けるものを友と見なし、友の苦しみに共感する宗教、と言えるのではないか。

ともあれ、生けるものを「友」、つまり自分と同等のものを見なすこの「慈しみの心」は、生けるものを自分より一段下に見る「憐れみの心」ではない。これは、人間と動物の間に明確な一線を画するキリスト教と比較して、仏教の特筆すべき点ではなからうか。インドの最も著名な哲学者、シャンカラは「ブラフマ・ストトラ」[に対する]「シャンカラの釈論」の冒頭部で、人間には知識の発達があつてもその言動は家畜に等しいと述べ、人間と動物の行動に本質的な差はないとしている<sup>35</sup>。中村元によれば、「インド人は人間と動物をふくめて「生けるもの」という概念をたてる。『……』人間を意味している場合にも、なお「人間」という語を用いないで、「生けるもの」という呼称を用いている場合が非常に多い<sup>36</sup>」という。

ともあれ「不殺生戒」は生けるものを言わば人間の友と考えることから生み出されたと言える。では、「業」や「解脱」と共に仏教思想の根幹をなす、極めて重要な「輪廻転生」という概念においては、生けるもの、動物と人間はどのような関係にあるのだろうか？

### (三) 輪廻転生の思想

仏教における動物と人間の関係を考察する上で鍵となる、極めて重要、不可欠な思想が、samsara (サンサーラ) の思想である。samsara とは、「生命を有するものが生死をくりかえすこと。生まれ変わり死に変わりしてとどまることではないこと」<sup>(37)</sup>で、「輪廻」とも訳される。つまり、生あるものは、肉体は死んでも実は滅びることなく別の肉体に生まれ変わり、車輪の回転のようにとどまることなく生き死にを繰り返す、という思想である。従って仏教では、すべての生きものには「来世」のみならず「前世」(過去世)があり、またその「来世」もキリスト教のように永遠の世界ではなく、有限なのである。一切衆生は生まれ変わり死に変わりして無数の世を輪廻転生するという。「ダンマパダ」(法句経) 六〇では、「眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い」<sup>(38)</sup>と説かれている。そしてその輪廻には因果応報の原則が適用されるといふ。つまり、前世の行為の善悪によって現世に生まれ、現世の行為の善悪によって来世が決まるのである。そして、この際限ない生死の繰り返しから離脱して(解脱)、「涅槃」つまり絶対の安らぎの境地に到達することが理想とされたのである。

では、一切衆生が輪廻する三界六道(または五道)とはどのような世界なのか見てみよう。仏教では輪廻の世界を最も上から順に無

色界、色界、欲界の三つに分け、欲界をまた上から天人、人間、修羅または阿修羅、畜生、餓鬼、地獄の「六趣」または「六道」に分けた。(修羅を地獄におさめる「五趣」あるいは「五道」の考え方もある。)そして、天人、人間、(阿)修羅を「三善道」と呼ぶのに対して、畜生、餓鬼、地獄は「三悪趣」または「三惡道」、「三途」と呼ばれ、死後にたどる苦しい厭うべき世界として恐れられた。

では、どのような「業」によって、衆生はそれぞれの世界に再生するのだろうか? 『業の分類』という経説の中から、「畜生」と「人間」に再生するという「業」についての記述を引用してみよう。

「……」畜生の胎に生まれさせる業とは、何か。すなわち、邪悪な心の持主の身・口・意の程度度の悪事。貪(貪欲)をひきおこす種々さまざまな行為。慎(憎悪)をひきおこす種々さまざまのまな行為。癡(愚癡)をひきおこす種々さまざまの行為。両親および出家者たちに不適當な贈物をする。畜生の胎に生まれた衆生を嘲笑する。[……]<sup>(41)</sup>

「……」人間の世界に生まれさせる業とは、何か。すなわち、十分に実行された場合と不十分な場合のいずれにせよ、十善道である。十種とは、何々か。身体の行為が三種(不殺生、不偷盜、不邪淫のこと)、口の行為が四種(不妄語、不悪口、不両舌、不綺語のこと)、意の行為が三種(無貪、無瞋、正見のこと)である。これが人間の世界に生まれさせる業である。<sup>(42)</sup>

つまり仏教でいう「十善道」をたとえ不十分であっても、実行すれ

ば人間界に生まれることができる、というに對して、邪悪な心の持ち主、「十善道」を中程度にししか実行できなかった者等々は畜生に生まれ変わる、というのである。では經典では具体的に、人間は現世でどのような行いをする、来世でどのような動物に生まれ変わるとされているのだろうか？再びシュミットハウゼン／マイトウリムルティの「仏教における動物と人間」によつて見てみよう。

憎悪の心を持つ者は毒蛇、あるいはその他の毒を持つ生き物として転生する。あるいは、誤つた見解に基づいて互いに無益な喧嘩をした人々は、蛇とマングース、馬と水牛、あるいはカラスとフクロウ、つまり互いに敵対する動物同士として生まれ変わる。また、町や村で騒がしい音をたてて暴れ、住民を恐怖に陥れ、家から追い出した人々は、カモシカとして生まれ変わり荒野で常に不安の中で暮らすことになる。他の人を猿あるいは犬とののしる者は自分が猿あるいは犬に生まれ変わる。鳥刺しは死後、ハゲタカやカラス等に追われ切り刻まれる。あるいは、祭祀で犠牲にされる山羊は、前世では自分が山羊を犠牲にしたバラモンであつた。また、追い出し獵で野呂鹿を狩つたり、あるいは訓練された鷹を使って鳥を狩つた人々は野呂鹿や鳥に生まれ変わり、今度は同じように自分たちが狩られる。また、山中で修行中の僧侶が石にぶつかつて蟻を一匹殺してしまつた時には、その蟻はイノシシに生まれ変わり、石を踏み碎いて僧侶に傷を負わせる。蛇を殺す者はあの世で大蛇に食べられる。借りたものを返さなかつた人々は債権者の家畜に生まれ変わる、等々である<sup>13)</sup>。これと似た善因善果、悪因悪果応報の話は『日本国現報

善悪靈異記』、いわゆる『日本靈異記』にも横溢していることは周知のことである。人間と比べて動物は常にネガティブなイメージで捉えられているのである。そして動物に転生することは前世の悪業による望ましくない結果と見なされ、動物は人間に悪行を行わせないための警告の手段とされているのである。「輪廻転生」の思想においては、後述の「盲亀浮木」にたとえられるように、人間が得難い存在形式であるのに比べて、動物は地獄の手前の厭うべき存在形式なのである。シュミットハウゼン／マイトウリムルティによれば、經典では「輪廻転生」を説く場合には教訓的意図から、人間存在は動物に比して相対的に幸福な、あるいはそれどころか圧倒的に幸福なものとして描かれ、精進と救済のためのチャンスを与えられた存在と見なされているという。それにひきかえ動物の存在条件、能力、行動は人間に比べてかなり暗い色彩で描かれている。動物存在は人間に比べてはるかに不快で苦痛に満ちており、例えば馬、牛、羊、そして山羊は草によつて生き、犬や豚は糞によつて生き、虫は地面の暗闇の中で、魚は水の中で、蛆は腐つた魚の中で生きる、とされる。つまり、人間の見方からすれば、すべて不快な、嫌悪を感じさせるものである。更に悪いことに、絶えず飢えや渇き、寒さや熱さに脅かされ、生存競争で餌の肉を奪い合い、あるいは人間による搾取、虐待、そして迫害を蒙らねばならない。要するに「動物がどれほど不幸かは完全に叙述しがたい！」という<sup>14)</sup>。

「輪廻転生」の概念では、「人間界」も、たとえ得難い存在形式であつても、悪業の報いを受けて生まれる迷いの世界の一つには違い

なかつたから、人間にすら生まれ変わらないことが大きな願いであったが、畜生の世界に転生することは、それよりはるかに忌み嫌われたのである。「不殺生戒」では、動物は人間と同等の友と考えられたのに比して、「輪廻転生」の思想では、人間と動物の間には決定的な相違、あるいは差別が認められるのである。動物が相変らず人間の友だとすれば、それは言わば「不幸な境涯にいる友」、「自分はその境涯に陥りたくない友」と見なされている、と言えようか。

では、人間は輪廻転生から解脱して涅槃の境地に入ることが理想とされたが、動物にも解脱は可能なのだろうか？

#### (四) 動物に解脱は可能か？

「大王よ、畜生は、たといよく実践しても、真理の観察はありません<sup>45</sup>。」紀元前二世紀後半、西北インドを支配したギリシヤ人であるバクトリア王メナンドロス（インド名ミリンダ）が「正しく実践する者たちのすべてに、真理の観察がありますか？」と尋ねたのに対して、仏教の学僧ナーガセーナが答えた言葉である。つまり、畜生は、へあらかんのさとり<sup>46</sup>の境地に向かつて、専念し、到達し、そして四つの真理（四諦）を一度に到達する、つまり、ねはんの世界に通達することはできない、という。『小部經典』の中にも、獸を人間よりも劣つた存在、あるいは智慧のないものとして軽蔑している箇所が見られる。例えば、『スッタニパータ』の二七五には、

もしもかれが荒々しいことを語り、他人を苦しめ悩ますこと

を好み、獸（のごとく）であるならば、その人の生活はさらに悪いものとなり、自分の塵汚れを増す<sup>46</sup>。

とあり、また『ダンマパダ』一五二には、次のように記されている。学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。かれの肉は増えるが、かれの智慧は増えない<sup>47</sup>。

あるいは、『テラガーター』の九五八には、

愚かで、怒り易く、戒行に専念せず、傲慢で、争闘を楽しみとする獸（のごとき輩）が横行するであろう<sup>48</sup>。

とある。中村元によれば、仏教の「八難処」という觀念に、人間は修行のための資格あるものとして尊いが、それに比べて、仏を見ず、正法を聞くを得ざる境界として次の八種が挙げられているという。つまりその八種とは、地獄、畜生、長寿天、辺地、器官の欠けている人（盲聾瘖瘂）、誤つた見解をもっている人（世智弁聰）、もろもろの如来の出でたまわぬ時（仏前仏後）だという<sup>49</sup>。（仏教經典には、動物のみならず女性や身体障害者に対する蔑視が散見されるが、ここにもそれが表れている。）つまり、動物は確かに注意を集中して、何かの結論を引き出して実行に移すことができるかも知れないが、物事の真理を洞察する智慧がないとされる。つまり無知によって刻印された畜生は、仏教における救済の道を実現する能力に欠けていとされるのである。ここにも人間と動物の間に大きな相違がある。他方、動物は弱肉強食の原則によって生きており、同情ということを知らないし、近親相姦するが故に不道德だと見なされているという。動物の自然の本能的行為は、仏教道德からすれば悪業とみなさ

れ、動物はその衝動的行為によって悪いカルマを集め、それによって人間のようになり高い存在形式への転生を困難にしているという<sup>30)</sup>。確かに「相应部経典」にも、人身を受けることの難しさをたとえた次のような箇所がある。

諸比丘よ、譬へば人あり、一孔ある軛を海中に投ぜんに、こゝに盲亀あり、一百年に一たび浮ぶ。／諸比丘よ、汝等の意に於て云何、彼盲亀は一百年に一たび浮びて彼一孔ある軛に首を入れんや。／大徳よ、若し何時にか然りとするも長時を過ぎん。／諸比丘よ、彼盲亀一百年に一たび浮びて彼一孔ある軛に首を入る、は寧ろ速なり、諸比丘よ、一たび墮處に到れる愚者の人身を得るが如きは然らず。何を以ての故なりや。／諸比丘よ、彼處には、法行・平等行・善業・福業なし、諸比丘よ、彼にては互に噉らひ弱者を噉ふ。何を以ての故なりや。／諸比丘よ、四聖諦を見ざるが故なり。〔……<sup>51)</sup>〕

つまり、一度畜生という存在形式に落ちた者が人間存在に戻るよりも、百年に一度だけ海中から頭を出す亀が、大洋を風のまにまに漂ってくる流木の一つの孔に偶然頭を突つ込む方が簡単だ、という訳である。それほど人間に生まれるのは難しいというのである。その理由は、動物はブツダの説く四聖諦を知らないが故に、ブツダの教えに則った行いも善行もなさず、互いに食い合い、弱肉強食をしていくからだという。動物が互いに食い合うことは仏教道徳の上から悪業とされ、悪業はより高い存在への動物の昇進を遮断するので、彼らは殆ど必然的に惨めな存在形式に留まることになってしまう。

一度畜生の世界に身を落としてしまえば、人間の世界に転生することは極めて困難となり、従って解脱して涅槃の世界に入ることはいよいよ難しくなる、という訳である。

しかし、解脱の道が、極めて困難だとはいえ、動物に完全に閉ざされている訳ではない。「スッタニパータ」の二三に次のような記述がある。

ここに集まった諸々の生きものは、地上のものでも、空中のものでも、すべて歓喜せよ。そうしてここを留めてわが説くところを聞け<sup>32)</sup>。

人間のみならず一切衆生は解脱への道を説くブツダの教えに耳を傾けよ、と言っている訳である。つまり、人間だけでなく動物にも解脱への道が開かれているのである。実際、釈迦入滅の際には鳥獣も集まり嘆き悲しんだと言われている。

また、仏教における動物を考える上で忘れてはならないのが、古代インドの仏教説話集「ジャータカ」である。これは、釈迦族の王子としてこの世に生まれる前のブツダを菩薩ととらえ、そのブツダが過去に無数の生を重ねる間、天人、国王、大臣、長者、庶民、盜賊、あるいは象、猿、孔雀、兎、魚などの動物といった様々な姿で種々の善行功德を重ね、生きとし生けるものを救済する菩薩の修行を積んだという物語である。そこでは過去と現在の行為の因果関係(業報)が明らかにされ、自己犠牲と忍耐が説かれている。中でも冒頭に挙げた「捨身飼虎」の物語、あるいは日本文学にも多様に取り込まれてきた雪山童子をはじめ、鷹に追われた鳩を救うために自分

の肉を切り取って鷹に与えたシビ王の物語や、客をもてなすために

火中に身を投じた兎の話など、自己犠牲の物語が非常に多い。そして注目すべきことに、これら薩多太子や雪山童子ら人間と並んで、今挙げた兎の他にも獅子、鹿、猿、鶴等々の動物が他者を救うために進んで自己を犠牲にする話は非常に多いのである。動物たちは人間同様、様々な能力と性格を備え、人間と同じように行動している。

そして、たとえ自己犠牲にまでは到らなくとも、動物は道徳的教養を理解し、実践し、それを他者に、動物だけでなく人間にすら教えることができる存在として描かれているのである。つまり、人間のみならず動物も宗教的意義のあるものとして捉えられているのである。実際また菩薩の目的は、悟りの真理を携えて現実の中に降り立ち、共歎同苦しなから一切衆生の救済に努めることと考えられている。従って、動物にも救済される可能性は残されているし、たとえ悟りの境地にまで到ることが出来ない場合でも、自己犠牲などの有益な行為によって宗教的功績をあげる能力があり、その功績によって救済を可能にする、より良い存在形式に生まれ変わることができるのである。

更に、大乘仏教になると「如来蔵」という思想も生まれてくる。つまり、全ての衆生は悟りを開き、如来（仏）となる可能性を備えている、というもので、「仏性」とも言われる。大乘の『涅槃経』に「一切衆生悉有仏性」と表現されているものである。つまり、すべての生けるものは、従って動物もまた、煩惱に隠されてはいても、少なくとも素質として、既にブツダの状態を常に自分の中に備えてい

ると考えられている。

## (五) おわりに

インドの旅行記などを読んでみると、かの地では猿や牛が人間を恐れることなく、まるで人間の友達であるかのようなようだという。筆者も敬虔な仏教国タイに数日滞在したことがあるが、街角の至る所にお米やその他の食物が入った皿や盆が置いてあり、犬、猫は勿論、小鳥たちがそれを啄んでいた。虐待する者は一人もおらず、お腹の大きな犬、猫が至る所に悠々と寝そべり、街中の人間も決して清潔な生活をしているとは言い難かったが、現代の先進諸国の清潔な都市にはない、暖かいものを感じたものである。

増谷文雄も、仏教の「慈悲」の「慈」は、サンスクリットの "maitreya" で、その語根は「友」 "mitra" から来たとして、更に次のように述べている。

この世のつねの生活の中においては、ある者は王者として人々に君臨し、またある者は奴隷として貧苦に泣く。だが、一たび人間性の深きところに沈潜してみれば、すべて同じく生・老・病・死の遁れがたい運命を背負い、何時おそいくるやも知れぬ死のまえに、恐れおののく哀れな存在にしかすぎない。仏教は、その人間性の深きところにおいて人々をとらえるが故に、彼らはまったく平等であり、同朋である。そして、彼らをしかと結びつけるものは、同苦同悲の共感にほかならないとすれば、そ

ここに湧きいでる慈しみの泉は、また友情にほかならないではないか<sup>30)</sup>。

ここでは、同苦同悲の共感、友情が人間について述べられている。が、しかし仏教では、動物が死を認識するかどうかは別問題として、この全く同じ共感、友情が、人間に限らず生きとし生けるものすべてについても同じように当てはめられていると言えるだろう。確かに仏典でも、動物は人間に比べて知的、道徳的に低い不幸な存在と見なされ、同じ殺生をするにしても、対象が人間であった場合と動物であった場合では、人殺しの方が重罪とされる場合もあった<sup>31)</sup>。しかし、中村元が、インド人にとっては倫理的行為の主体は「生けるもの」であり、倫理的行動は単に人間相互の間に限られるものではない、インド人の倫理は「生けるもの」相互の間の倫理であった<sup>32)</sup>と述べているように、仏教にもその精神がそのまま受け入れられ、人間といえども特別視することなく、あくまでも一切衆生の中の一員として捉えられていると言える。「仏教は、動物に対する人間の独自の善的なうぬばれのものとも少ない宗教<sup>33)</sup>。」とされているが、人間の自己中心主義を超克する契機がそこにある、とは言えないだろうか？

筆者は前回、キリスト教、特にその母胎となった旧約聖書に表れた動物観を探り、今回は阿含経を中心として仏教の動物観を考察した。動物は人間に仕え支配されるために生きている、というのが旧約聖書の思想だとすれば、西欧近代市民の動物愛護運動はそれとどのような関係にあるのだろうか？ペンサムの快樂主義とキリスト教

の慈愛とはどう関わるのか？我が国は世界有数の仏教国のひとつであるが、原始仏教が備えていた動物に対する友情の精神は、現代ではどのような形で受け継がれているのだろうか？あるいは、全く受け継がれていないのだろうか？動物達は日本ではどのように扱われてきたのだろうか？現在はそのような状況に置かれているのだろうか？P・シンガーを含む生命倫理の問題から動物愛護法をめぐる社会運動、あるいは多くの日本人にとって最も身近な宮澤賢治の童話に到るまで、問題は極めて広い。

#### 注

- (1) 増谷文雄『智慧と愛のことは 阿含経』(筑摩書房、昭和四九年) 一頁。
- (2) 増谷文雄、前掲書、二一三頁。
- (3) 「出エジプト記」第二〇章と「申命記」第五章。
- (4) 但し、仏訳の中には、人にも動物にも使える“tier”という動詞を使って、“Tu ne tueras pas.”としてゐるものもある。
- (5) Arthur Schopenhauer, *Schriften zur Naturphilosophie und zur Ethik*, in Arthur Schopenhauer · *Sämtliche Werke*, Bd. 4, (Mannheim, F. A. Brockhaus, 1988), S. 239.
- (6) 塚本善隆「他」編、増谷文雄、梅原猛『仏教の思想 一 知恵と慈悲(ヘブダ)』(角川書店、一九六八年) 二七五―二七六頁。
- (7) 木村泰賢『木村泰賢全集』第三卷(大法輪閣、昭和六二年) 一八一頁。
- (8) 木村泰賢、前掲書、二九〇頁。

- (9) 増谷文雄『阿含經典』第四卷(筑摩書房、一九八二年) 八二―八三頁。
- (10) 中村元訳『ブツダのこぼ』(岩波書店、一九九七年) 六六―六七頁。
- (11) 岩本裕訳『佛教聖典選 第一卷 初期經典』(読売新聞社、昭和四九年) 二七〇―二七二頁。
- (12) 中村元訳、前掲書、四三三頁。
- (13) 中村元訳、前掲書、一七頁。
- (14) 中村元訳、前掲書、三三頁。なお、仏教では、生きものをその生まれ方によって、次の四つに分類し、四生と呼ぶ。(一)胎生(二)卵生(三)湿生(四)化生。そして人間をも一種の生物として「胎生」の内に含め、他の生物と区別して特別視することはなかった。
- (15) 中村元訳、前掲書、二八二頁。
- (16) 中村元訳、前掲書、三七―三八頁。
- (17) Lambert Schmithausen und Mudagamwe Maitrimurthi, "Tier und Mensch im Buddhismus", in Hrsg. von Paul Münch in Verbindung mit Rainer Walz, *Tiere und Menschen, Geschichte und Aktualität eines prekären Verhältnisses* (Paderborn, Verlag Ferdinand Schöningh GmbH, 1998), S. 211 f.
- (18) 佐藤密雄「原始仏教の出家生活——大法輪石原青英会講演会から——」『大法輪』第四五巻 第一〇号(大法輪閣、昭和五三年)六一頁。
- (19) 中村元訳、前掲書、二〇七頁。
- (20) 中村元「中村元選集 第一五巻 原始仏教の思想 一」(春秋社、一九九三年) 三三九頁。
- (21) 『岩波仏教辞典』によれば、「菩薩」とは大乗仏教の場合、「自己」

人の悟りを求めて修行するのではなく、悟りの真理を携えて現実の中におり立ち、世のため人のために実践(慈悲利他行)し、すすんでは悟りの真理によって現実社会の浄土化(浄仏国土)に努める者のことをいう。

- (22) Lambert Schmithausen und Mudagamwe Maitrimurthi, *aa.O.*, S. 191 f. に明らかなように、シユミットハウゼンらによれば、職業による差別思想が原始仏典に見られることになる。これは、生まれや家柄や職業によってその人の価値をはかつてはならないとする釈迦の教えとは明らかに矛盾していることを指摘しておく。
- (23) 木村泰賢、前掲書、二九二頁。
- (24) 中村元他『岩波仏教辞典』(岩波書店、一九八九年)「罰」の項より。
- (25) 高橋順次郎監修『南傳大藏經』第十三巻 相應部經典 二 (大正新脩大藏經刊行會、昭和四六年) 二七七―二七九頁。
- (26) 小泉道校注『日本書異記』(新潮社、昭和五九年) 七二頁。
- (27) 高橋順次郎監修『南傳大藏經』第十六巻下 相應部經典 六 (大正新脩大藏經刊行會、昭和四六年) 二二六頁。
- (28) 中村元訳『ブツダの真理のこぼ』(岩波書店、一九九八年) 二八頁。
- (29) 中村元訳『ブツダの真理のこぼ』(岩波書店、一九九七年) 一五三頁。
- (30) 中村元訳『ブツダの真理のこぼ』(岩波書店、一九九八年) 一七九頁。
- (31) 高橋順次郎監修『南傳大藏經』第十巻 中部經典 二 (大正新脩大藏經刊行會、昭和四六年) 一三五―一三六頁。
- (32) 拙論「動物と人間——文明批判の視点から——」(その二) 思想史的考察、『年報人間科学』第一九号(大阪大学人間科学部、一九

- 九八年) 八五頁。
- (34) ひろさちや『仏教とキリスト教——どう違うか50のQ&A——』(新潮社、昭和六二年) 八六頁。
- (35) 金倉圓照『シャンカラの哲学 プラフマ・ストトラ釈論の全訳』上 (春秋社、昭和五五年) 五〜六頁。
- (36) 中村元『仏教動物散策』(東京書籍株式会社、昭和六三年) 一一頁。
- (37) 中村元他『岩波仏教辞典』(岩波書店、一九八九年)「生死」の項より。
- (38) 中村元訳『ブッダの真理のことは・感興のことは』(岩波文庫、一九八八年) 一八頁。
- (41) 岩本裕訳、前掲書、二八二頁。
- (42) 岩本裕訳、前掲書、二八四頁。
- (43) Lambert Schmithausen und Mudagamwe Maithirurthi, a.a.O., S. 206.
- (44) Ebenda, S. 208 f.
- (45) 中村元、早島鏡正訳『ミリンダ王の問い インドとギリシャの対決』三(平凡社、一九八三年) 八六頁。
- (46) 中村元訳『ブッダのことは』(岩波書店、一九九七年) 六一頁。
- (47) 中村元訳『ブッダの真理のことは・感興のことは』(岩波書店、一九八八年) 三二頁。
- (48) 中村元訳『仏弟子の告白 尼僧の告白』(岩波書店、一九八四年) 一八四頁。
- (49) 中村元『中村元選集 第一五巻 原始仏教の思想 一』(春秋社、一九九三年) 三三九頁。
- (50) Lambert Schmithausen und Mudagamwe Maithirurthi, a.a.O., S. 210.
- (51) 高楠順次郎監修『南傳大藏經』第十六巻下 相應部經典 六 (大正新脩大藏經刊行會 昭和四六年) 三九〇〜三九二頁。
- (58) 中村元訳、前掲書、五一頁。
- (59) 増谷文雄『智慧と愛のことは 阿含經』(筑摩書房、昭和四九年) 二四七頁。
- (60) 木村泰賢、前掲書、二六五〜二六六頁。
- (61) 中村元『仏教動物散策』(東京書籍株式会社、昭和六三年) 一一〜一二頁。
- (62) 中村元、前掲書、二頁。

**Tier und Mensch**  
—**Unter einem Gesichtspunkt der Zivilisationskritik**—  
**Teil 2. Tieranschauung im Buddhismus**  
—**Sutta-pitaka als Mittelpunkt**—

Atsuko MIYATA

Vor dem Hintergrund, daß das Tier im Christentum nur als Gegenstand der menschlichen Naturbeherrschung galt, wird in diesem Aufsatz nach der Stellung des Tieres im Buddhismus gefragt.

Das Verbot, zu töten, in Moses Zehn Geboten bezieht sich ausschließlich auf das Ermorden von Menschen. Das entsprechende Gebot im Buddhismus (*pāṇātipatā paṭivirato hoti*) gilt aber für alles und jedes Lebewesen, sogar für die dem Menschen gefährlichen Tiere. Hier fordert die buddhistische Tradition den Menschen auf, zu allen Lebewesen ein Verhältnis von Freundschaft und Wohlwollen zu pflegen. Schließlich soll ein *bodhisattva* sogar bereit gewesen sein, seinen Körper oder Teile davon hungrigen Tieren zu überlassen.

Diese Idee hat ihren Ursprung nicht nur in der Karma- oder Wiedergeburtstheorie (Durchlässigkeit der Existenzformen), sondern auch in der gesinnungsethischen Bereitschaft, sich in andere hineinzuversetzen und sie so zu behandeln, wie man selbst behandelt werden möchte. Dieses Postulat der Freundschaft mit allen Lebewesen ist etwas anderes als Barmherzigkeit. Barmherzigkeit könnte auch ein Herabsehen auf andere als etwas Niedrigeres bedeuten. Während das Christentum Liebe predigt, lehrt der Buddhismus Sanskrit-Begriffe wie *maitri* und *karuna*. Das Wort *maitri* stammt vom Wort *mitra* („Freund“); es bedeutet also etwa „höchste Freundschaft“. Das Wort *karuna* hat seinen Ursprung in „Klage“ und bedeutet das Mitleiden mit den Leidenden und Klagenden. Der Buddhismus sieht also alle und jedes Lebewesen als Freund an und behandelt den Menschen nicht als „Krönung der Schöpfung“, sondern für den Buddhismus ist der Mensch gleichrangig mit allen anderen Lebewesen. Das heißt: der Weg zur Erlösung ist sowohl den Tieren als auch den Menschen geöffnet. Die Tiere haben auch religiöse Bedeutung. Deshalb könnte man sagen: der Buddhismus ist eine Religion, für die das menschliche Mitleid mit allen Lebewesen, also den Leidenden, absoluten Vorrang hat. Die buddhistische Anschauung in bezug auf Tiere könnte uns zur Befreiung von einem menschlichen rechthaberischen Dünkel gegenüber Tieren verhelfen.

**Schlüsselwörter**

Tier

Buddhismus

Mitleid

Opferung

Töten des Lebewesens